
広げよう！学びと仲間の輪

～寺子屋～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

本プロジェクトの名称は、「広げよう！学びと仲間の輪～寺子屋～」である。

私たちが生きる現代は隣に住んでいる人を知らない、言葉を交わしたことがないなど、家庭と地域社会との関わりが希薄になってきている。今後ますます複雑な社会になるにつれて、様々な人と関わる力が子どもたちに求められているが、それを学校教育だけで育むことは困難である。そこで私たちは、かつて「寺子屋」として教育を担ってきた、教育の原点ともいえる寺院に着目し、社会教育の視点から子どもたちと関わろうと考え、本プロジェクトを行うこととした。

2. 代表者および構成員

・代表者

梅田ちひろ 社会領域専攻 3回生

・構成員

木本玲央 社会領域専攻 3回生

山本拓人 理科領域専攻 3回生

浅澤一朗 理科領域専攻 3回生

奥山加奈子 国語領域専攻 2回生

中田涼輔 数学領域専攻 2回生

道端啓吾 理科領域専攻 2回生

富永葵海 理科領域専攻 2回生

小坂陽加里 理科領域専攻 2回生

3. 助言教員

市田克利先生

4. 協力団体

・遍照院（京都府宇治田原町）

本プロジェクトで予定していたイベント会場であり、イベントの企画から協力していただいた。

第2章 内容や実施経過など

1. イベントの準備

(1) 当日の企画

〈時期〉4月、6～7月

寺院、遍照院に協力していただいて開催するイベント「てらこやへんじょういん」当日の企画を行った。学生だけで1回、遍照院と合同で3回の計4回打ち合わせを行った。新型コロナウイルス感染拡大によりイベントを中止したため、打ち合わせも途中までしか行えていない。行えた打ち合わせまでで決定した当日の主な企画は以下の通りである。

レクリエーション：アイスブレイクや自己紹介

イベントの参加者を確認してから企画する予定だったため、具体的なことは決まっていなかった。

モノづくり体験：「なんちゃってステンドグラス」

イベントの思い出に残るものとして工作を行う予定だった。

工作は身近なものを使うことで、身の回りにあるものを大切にしようとする心を育むねらいがある。また、対象となる子どもは幅広い年齢が予想されたため、できるだけ工程が簡単になるよう試作品を作る等して一から考えた。その結果、主に写真立てやアルミホイル、マジックペンを使用して簡単且つオリジナルなステンドグラスを作ることができるようにした。

遊び企画：スイカ割りやおもちゃ流しなど

子どもたちの積極的な交流を図るためにいくつかの班を作り、スイカ割りやおもちゃ流しなどの遊びを企画した。この際に使用するスイカや竹は寺子屋のイベント開催を知った地域の方々が協力して用意してくださる予定であった。

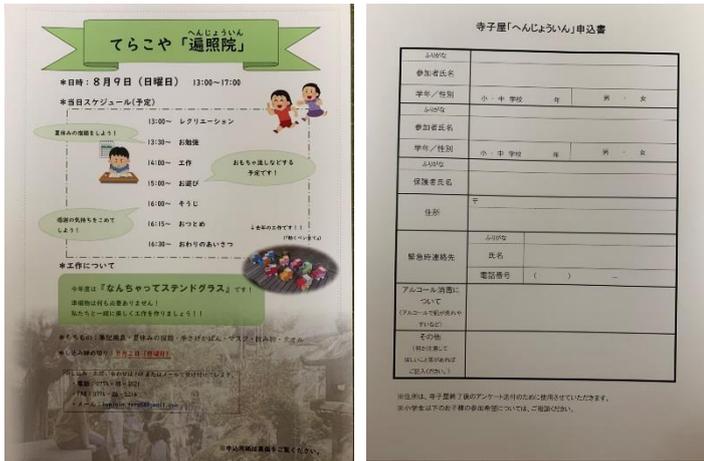
寺院ならではの体験：掃除、お勤め

寺院との打ち合わせの中で、「子どもにとってお寺は近寄りやすい・怖いなどの印象があるのではないか」というお話をお聞きした。そのような子どもたちに友達と「お寺ならではの」体験をさせることでお寺での思い出を作るねらいで企画した。

(2) イベントの広報

〈時期〉7月上旬～

イベントを広報するために、以下のようなチラシを作成した。新型コロナウイルス感染対策のため、今年度は昨年度までの参加者のみへの広告に留めた。チラシと一緒に感染予防対策についてのお願いも一緒に各家庭に送付した。



2. イベントの実施

新型コロナウイルス感染拡大のため、7月下旬にイベント中止を決断したため、今年度はイベントを行うことはできなかった。

第3章 結果や成果など

イベントの実施は8月9日を予定していたが、前途のように新型コロナウイルス感染拡大のため企画途中でイベント中止を決断したため、イベントを通して結果や成果を得られるに至らなかった。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. まとめと反省

今年度は、本プロジェクトのイベントを行うかどうか模索しながら進める形となった。そのため4月から遍照院さんとより綿密にやり取りを行ってきた。学生同士はもちろん遍照院さんと一緒にどのようにすれば安全に子どもたちに楽しんでもらえるようなイベントが行えるかを考えてきた。

今年度は、本プロジェクトに参加する学生が増えたため、より精力的に活動しようと考えていたが、限られた中での活動となってしまった。本プロジェクトは、イベントの企画・運営だけでなく広報活動を行うことを通して得られる学びや経験

を大切にしているため、参加した多くの学生にそのことが伝えられなかったことが残念である。また、毎年このイベントを楽しみにしてくださる参加者の方々にイベント中止後も何か交流を図れるような活動を行うことができなかったことも心残りとなった。

2. 今後の展望

来年度からもこの状況が続くことを想定して、そのような中で安全に配慮しながら子どもたちと交流できる機会を設けられないかを考え直すことから始めたい。これまでのイベントを楽しみにしてくださっている参加者のために来年度はぜひなにか活動が行えるよう試行錯誤していきたい。また、企画によっては学内外への広報活動も積極的に行っていく。